

Kammbrohn (Camborne) – Industrial Legacy

Philip Rush

Across the river Tamar, and with that familiar sign “Kernow agas Dynnergh” (“Welcome to Cornwall”) comes that comfortable sensation of returning home. But still an hour more through a landscape littered with crumbling engine houses, blowing houses and chimney stacks, the relics of Cornwall’s industrial tin mining past, before we reach Camborne, a granite town of some 20,000 people, and where as a freshly graduated and very green teacher I bought my first home. Once it was a proud, prosperous place, reflected in the relative grandeur of its municipal buildings, a town built on tin and copper. At one time Camborne and the adjacent town Redruth was the richest mining area in the world. Britain’s Industrial Revolution has a footprint here: in 1801 the engineer Richard Trevithick showed off the world’s first steam-powered road locomotive, the “Puffing Devil”. Trevithick’s statue stands commandingly in front of Camborne Library, his hand pointing up the hill (though the impression is often diminished by another local tradition of balancing an orange traffic cone on his head). Opposite is a granite block wall, one of the last remnants of the Holman Engineering company. At the close of the 19th century, this company employed nearly half the working population of the town, and supplied equipment not only to the local mines around but also exported its massive machinery all over the English-speaking world. Now it’s only a name on

the wall.

In the late eighteenth century Camborne was no more than a small hamlet. With the discovery of tin and copper ore in the granite rocks beneath the area, Camborne flourished and boomed. The population expanded to over 15,000 souls. Long terraces of granite cottages were constructed to house those attracted there by the possibility of income. Most miners were ‘tributers’, receiving no salary, but sharing the rewards if and when a seam was found. It was a hard and cruel existence; hundreds of feet down ladders in almost total darkness, eight hours sweating and toiling bent over in the black and narrow tunnels, the sound of drills, hammers and occasional explosions damaging their eardrums in the confined spaces, the ever-present danger of rockfalls or poisonous gases, then back up the ladders and home. The average life expectancy of a miner was 26 years old. There are hundreds of miles of abandoned tunnels criss-crossing under the area, some very near the surface. They say that you can still hear the knockings of the long dead miners from above.

The last working tin mine in Camborne, South Crofty, closed in 1998. Camborne is re-inventing itself, but its ghosts remain.

(ラッシュ フィリップ)

Cornish Mine: Engine House



人為の魅力 ヲエネチア

高瀬淳一

都市は「人為の産物」である。農村のもつ自然との共存や自給自足の魅力をあえて捨てて、人は都市に群れる。都市は交易の場であり、そこで生きるには知恵とコミュニケーションが必要となる。都市の魅力はそうした人為の交錯と混沌にあるのだと思う。

通常の都市はなんらかの利便性をもって築かれる。ところが、ヴェネチアはちがう。まともな土地もないところに都市が創られた。干潟を埋め立て、小島を結んで、いわば土地そのものから都市を造ったと言ってもよいのだろう。

ヴェネチアは港町ともちがう。国土の一部が外の世界への窓口として使われ、それが街になった、というのが港町である。ヴェネチアはそうではなく、いわば島街であった。

潟に無理して街を築いたことは功を奏した。ヴェネチア人たちは世界各地に向く交易人となり、アドリア海沿いの港に適した場所を支配して新たな街を作り、点在する街によるネットワーク型海洋国家を建設した。その首都となったヴェネチアは、だから塩野七生の言うように「海の都」と呼ぶべきなのである（『海の都の物語』）。

ヴェネチアは大航海時代以前の「グローバル大国」であった。その政治的支配はギリシャやキプロスに及び、十字軍時代でさえイスラム教徒と交易していた。王国にはならず、一〇〇〇年に及ぶ歴史を「多文化共生マイノリティの共和国」で通した。たいしたものだと思う。

この街の「人為」を感じるには、観光客用のゴンドラではなく、日常の足であるヴァポレット（水上バス）に乗って、サン・ジョルジョ・マッジョーレ島に行ってみるとよい。鐘楼に上ると、ヴェネチアの「海の都」ぶりを俯瞰できる。

ただし冬は注意が必要。地球温暖化のせいで、冬は街が水浸しになることがある。この街は今も人為的努力で維持され続けている。

(たかせ じゅんいち)



〈わたしの地球〉 山口県長門市三隅

西川真子

山口県長門市三隅^{みすみ}は、画家香月泰男（一九二一—一九七四）が生まれた町だ。彼の画業は、テレビを見ていて偶然知った。たまたまチャンネルを回した時、その絵が眼に飛び込んできたのだ。

香月泰男は東京美術学校卒業後、一九四二年下関高等女学校で美術を教えていた時に応召し、旧満州に配属された。敗戦直後、香月の部隊は旧ソ連軍によってエニセイ河西方の収容所へ送られた。

香月は、強制労働でシベリアの凍土に穴を掘る最中も「これは絵になる、あれは絵にならない。そんなことばかり考えていた」と言う。香月が何時何処にいても、そこに「美」を発見する力を持つ人だったことを表す言葉だ。テレビにチラッと映った彼の絵にわたしは釘付けになったのも、彼が発見しその絵の中に閉じ込めた美に引き込まれたからだ。

生命を脅かすシベリアの冬。香月はそれを「シベリアの雪は美しかった」と回想している。だが、シベリア体験は美しい思い出に昇華できるものではなかった筈だ。死の影が迫る中でさえ、香月の眼は美の煌きを見逃さなかったのだ。

一九四七年に帰国後、香月は三隅で「凍河（エニセイ）」「荊」「餓」「四」「点呼」等と名付けられた作品（シベリア・シリーズ）を描いた。その日々の中、香月は三隅を〈わたしの地球〉と呼んだ。美を掴み取る彼の眼の力があつたからこそ、香月の三隅は地球一つ分の重さが全部詰まった場所となったのだ。

今、三隅には香月泰男美術館が建っている。香月は三隅で何を見ていたのか。それが知りたくて、わたしは新幹線、山陰本線、バスを乗り継ぎ二日掛けて三隅に行ったのに、三隅の町を一步も歩かずに帰って来てしまった。美術館で長居し、一日に三本、夕方にはたった一本しかないバスに乗り遅れそうになったからだ。

〈わたしの地球〉で、わたしは何を見つけられるのか。大切なものが見える眼がほしい。三隅に貰った宿題を、未だ抱えたままである。

（にしかわ まこ）

アメリカ聾教育発祥の地 ハートフォード

菊地俊一

ボストンからもニューヨークからもバスで二時間ほどのところにコネチカット州の州都ハートフォードがある。一六三三年に開拓された歴史の古い街だ。『トム・ソーヤの冒険』の作者マーク・トウエイン、『アンクル・トムの小屋』の女流作家ハリエット・ビーチャー・ストウ、辞書編纂者のノア・ウェブスターが住んでいた。保険業の会社がたくさんあることでも知られる。有名人が住んでいた家やワズワース・アテナウム美術館を訪問する観光客は多くいるが、街中にある手のひらの少女像を気にする観光客はほとんどいない。ハートフォードは一八一七年にアメリカで最初の公立聾学校 The American School for the Deaf ができた聾教育発祥の地でもある。来年その学校は創立二〇〇周年を迎える。この街に住む少女アリスは、仲間から離れていつもひとりりで遊んでいた。アリスが聾啞であることを知った牧師のギャロレットは、資金を集めイギリスに渡り手話を学ぼうとしたが、現地では冷たくあしらわれた。ロンドンで絶望的になっていたとき、偶然にもフランス人聾教師クレークと出会い、彼を頼ってパリに向かう。ギャロレットはパリで手話を学びながら、師であるクレークにアメリカで手話を教えてくれるよう何度も懇願した。病弱の母を残してアメリカには行けないと断るクレークだったが、ギャロレットの情熱に心が動き、ついにはアメリカに渡った。アメリカ手話がフランス手話と似ているのはそのためだ。アメリカに聴覚障害者のための大学を、というギャロレットの思いはやがて息子に受け継がれ、一八六四年にリンカーン大統領の承認により現在のギャロレット大学の前身ができた。現在ホワイト・ハウスの近くにあるギャロレット大学は、アメリカの大学の中で唯一、ひとりひとりの卒業証書に大統領自らが直筆で署名する。ハートフォードの人々は今もギャロレットとクレークのことを語り、命日にはそれぞれが眠る霊園に集まって功績をたたえている。

（きくち としかず）



アメリカ初の公立聾学校跡地に建つアリス像（現在の校舎はここから2キロの場所にある）

南京 紅樓夢散步

船越達志

今から約二五〇年前、清代乾隆期の長編小説「紅樓夢」には、金陵十二釵と呼ばれる十二人の美女が登場する。また「金陵十二釵」は「紅樓夢」の異名の一つでもある。ここに言う「金陵」とは南京の古称であり、「紅樓夢」と南京が密接な関係にある事を物語っている。「紅樓夢」の作者曹雪芹は、南京出身なのだ。「紅樓夢」に縁のあるスポットとしては、「紅樓芸文苑」、「烏龍潭公園」、「江寧織造博物館」の三箇所が挙げられる。「紅樓芸文苑」は、鐘山風景区の「明孝陵」（明太祖の陵墓）のすぐ近くにある庭園である。ここには、「紅樓夢」に登場する植物が植えられている。作中人物の像も据えてある。入り口には、仙界太虚幻境を模した空間があり、大きな牌楼が聳えている。霧に覆われると、まさに仙境そのものといった趣である。「明孝陵」には、曹雪芹の祖父曹寅が建碑に関わった碑（康熙帝の御筆）があり、「紅樓夢」第五十二回には「鐘山懷古」という題の詩が書かれている。この二点が、「紅樓芸文苑」のこの地に作られた所以である。

園の隣には「曹雪芹紅樓夢史料陳列館」がある。「烏龍潭公園」は、乾隆期の名園「随園」の面影を留める公園である。「随園」は一説に「紅樓夢」の舞台の原型とも言われる。園内には大きな池があり、往時の美しさを偲ばせる。池の側には、曹雪芹の銅像があり、それを覆う建築物には「曹雪芹紀念館」の看板が掲げられている。ここには、「紅樓山莊」という名のレストランもある。「江寧織造博物館」は江寧織造府跡地に作られた博物館である。市内繁華街に位置する。曹雪芹の家は、代々江寧織造の要職を世襲した名家であり、この地こそ作者が幼少時代を過ごした場所である。写真をみると（開館したてで筆者は未見）、外観は近代的な建築物のようであるが、内部には、江寧織造府を再現している部分もある。庭園も復元されているらしい。

(ふなきし さん)



紅樓芸文苑の牌楼

Montrésor, France

Douglas Wilkerson

Chambord, Blois, Chaumont, Amboise, Chenonceau, Villandry, Azay-le-Rideau, Saumur, Angers. The refined châteaux of the graceful Loire Valley, delicate pearls strung along the strand of the shimmering River Loire. Once home to the King of the French and the great French aristocracy, this picturesque jewel became the Cradle of France. Half a millennium later it gave birth to another identifiably French, though considerably less refined, institution, the *spectacle son et lumière*. The first modern iteration of this eminently Gallic “imposition” is usually traced to the ethereal Château de Chambord in the year 1952, and credited to the modern “magician” of electric showmanship, the aptly named Paul Robert-Houdin. Yet the combination of nocturnal illumination and crafted sonic effects predates this conquest of natural tranquility by technology. Events of great significance—the end of a war, the death of a king, the restoration of another—were celebrated throughout Western Europe with nighttime bonfires, song, music, and dance. Though such momentous events might have occurred only once in a lifetime, there was another occasion, recurring annually, which was marked far and wide with the same triumphant light and jubilation by those of high and low estate alike: the Eve of St. John’s Day.

The medieval village of Montrésor, in the Centre of France, suns itself quietly on the banks of the Indrois, a gentle tributary of the Indre, through which it contributes its placid waters to the Loire. In addition to the château, here can be found the imposing Collegiate Church of St. John the Baptist. Not far from this church, where the houses and gardens melt imperceptibly into the groves and fields of the countryside, as the last glimmers of the longest of summer days begin, at last, to falter, the festivities in honor of the birth of its patron saint commence. A fire is lit; it, too, falters, then takes hold, quickly driving back the gathering gloom and chill. Its light gradually spreads, revealing the faces of those seated round, eagerly waiting. The flames grow brighter, and the faces rise, as if by magic. From the darkness sound the notes of gleeful melody; arms link, legs shuttle back and forth, the dancers weave in, weave out, grow warm, ecstatic—an ecstasy of community which lasts far into the night, and on into future years, its memory and warmth unabated. The Fire of St. John. Of Montrésor.

(ウィルカーソン ダグラス)

オックスナード市 日本人墓地の思い出

森 明智

カリフォルニア州ロサンゼルスから車で一時間ほど北に向かうとオックスナード (Oxnard) という市があるが、二〇〇一年九月の間、筆者はここで留学中であつた。一般的な思い出を語るならば、日本から現地に到着して二日後に九・一一のテロが起きた事は忘れられない。日本ではマスメディアを中心に大騒ぎであつたようだが友人や両親からも心配する連絡が来たが、現地では実に呑気なもので、空港が閉鎖されるなどの事態はあつたが、いつもと変わらない日常であつた。

それとは別に、多文化という社会の様相について印象を深く持つたことは、市内の墓地に設けられていた日本人用の墓地であつた。筆者は当時日系アメリカ人の歴史やルーツについて興味を持っていたが、当時の英語の先生にこの事を話してみると「日系アメリカ人について興味があるなら、この市にも日本人用墓地があるよ」と聞かされて、早速行ってみたのだ。学校から歩いて行ける距離にあるという事だったので徒歩で向かつたが、十字架が立ち並ぶ典型的なアメリカ風の墓地の一角に、漢字とひらがなで墓碑銘が書かれた場所があり、移民の歴史を物語る無言の迫力にしばし圧倒された。没年などを見てみると、おそらく日本で言えば明治から昭和にかけて移住してきた人たちであると分かつたが、このような小さな町でも日本人たちが生きた証が堂々と残っている事が不思議でもあり、感慨深くもあつた。

後で再びこの話について聞いてみると、「日本人用の墓地のために市民が土地を寄付したのだ」という事だつた。遠い日本の地を離れ、異国の地で必死に生きた人生が、アメリカ市民にも受け入れてもらえたという事になるだろう。詳しく調べる時間はなかつたが、様々な歴史が埋もれているはずである。オックスナード市は決して大きな都市ではないが、それでも町の一角に多文化を味わせる事がこのようなアメリカの町の魅力であると思う。

(もり あきとも)

気仙沼市とタクロバン市

津田 守

ふたつの場所が思い浮かぶ。宮城県北東端に位置する気仙沼とフィリピン中部地方のレイテ島タクロバン。

二〇一一年三月一日の東日本大震災で、気仙沼は震度六弱を記録、高さ二〇メートルの津波が市内沿岸部を襲い、気仙沼湾の海底が最大一〇メートル削られたとされる。もちろん、死者・不明者・負傷者や家屋損壊など甚大な被害を及ぼした。

タクロバンは、二〇一三年一月八日、列島を横断した未曾有の超大型台風(アジア名「ハイヤン」、フィリピン名「ヨランダ」)の直撃を受けた。最大瞬間風速が一〇五メートル、暴風雨がビルの高層階にある大きな窓を打ち割るほどであつた。ただ、それくらいのことには「台風銀座」とも言えるフィリピンでは珍しくはなかつた。

つい数年前の津波の映像は、当時もその後もフィリピンのTVに何度も流されていたので、tsunamiを誰もが見てはいた。その直前の地震が起きたものであることも知っていた。

タクロバン市民は、台風到来予報から暴風雨と少々の高波は覚悟していた。高潮、すなわち typhoon surge 警報も出ていた。しかし、その規模は正に想定外で、太平洋に面する市内及びその周辺には、最大七メートルの高潮が襲つたのである。tsunami 警報が出ていれば、人々は高い建物や海岸から離れた場所に避難したのかも知れない。経験したことのない彼らは高潮が tsunami のようなものであるとは、およそ想像がつかなかつた。同市

だけで一万人近い死者・不明者を出したとされる。

震災から三か月後、私は気仙沼に嫁いだフィリピン人たちのコミュニティを訪れた。かの女らは立派に子育てをしながら、高齢化している地元の人々を明るく支えていることに強い印象を受けた。

台風から四か月後、私は調査のためタクロバンへ行った。街の様子は気仙沼と同様、否それ以上に悲惨な状態だつた。ただ、際立った違いは、町中に子どもたちが元気に動き回っていたことだ。国民全体の平均年齢が二十三歳という「若い」国だから当然とはいえ、復興への期待と責任を感じさせられたのである。

(つだ まもる)

フィリピン大学タクロバン校で学ぶ被災学生たち (2013年3月 津田守撮影)



両親と子供たちが育った街ルーアン

中村マリ・ポール



ルーアンの街並み

ルーアン市。セーヌ川沿いにパリ北西へ
電車で約一時間、人口十二万。

大聖堂は四世紀に基礎ができる。九世紀にバイキングに破壊されるも十一十六世紀にノルマン・ゴシック様式で再建。屋根の交点にある塔 (tour lanterne) の窓は屋根より高く、翼廊の交点を照らす。画家モネは季節や光の移ろいで大聖堂の正面が変わる様を一連の絵で描く。ヴィクトル・ユーゴーは「古い通りがある街、古い塔がある街、沢山の塔がある街」塔が海から押し寄せる霧を裂く「*Les Feuilles d'automne*」に書く。

後ろのサン・マクロ教会正面の精緻な彫刻。十四十六世紀にベストで多数の死者が出、新墓地と納骨堂 (Aître Saint-Maclou) が造られる。死者の頭蓋骨や足の骨を模す建物の支柱。

サン・トゥアン修道院は五五三年にロマネスク様式で建てられるも、バイキングに焼かれ、後にゴシック様式で再建される。ここでは毎年、特に夏にはオルガンなどのコンサートが多く開かれ、人々が今も音楽を楽しむ。隣にある、修道僧の嘗ての住居は今も市役所。サン・トゥアン修道院近くのコルネイユ高等学校は、劇作家コルネイユが在時通った中学校。サン・トゥアンや大聖堂周辺に残る、庶民が暮らした家は木造三階か四階建て。薬と粘土で固めた外壁と木枠。一階には家具の骨董屋や古本屋が並ぶ。白地に様々な図柄が描かれたルーアン特有の陶器。今では職人は数少ない。通りの一角に掛かる大時計 (Gros-Horloge)、その隣に未だ残る、外敵を見張る塔 (Beffroi)。現代的なジャンヌ・ダルク教会は、彼女が一四三二年五月三十日に火刑にされた場所に。一五十七年フランソワ一世がルーアル港を整備、以来大型船が週上。今なお麦の船積み港ルーアン。セーヌ川に架かる、技術を尽くしたフロバール跳ね橋。ここは『ボヴァリー夫人』を書いたフロバールの生誕地。

(なかむら まり・ぽる)

エクスイアン・プロヴァンス

武井由紀

一日もあれば旧市街地を歩いて散策できる規模のこの街を歩いていると、「C」が刻印されたフランス製の目印が道に埋め込まれていることに気付く。ここが生誕と終焉の地となった Céramie ゆかりの地に導いてくれるのだ。彼のアトリエも悪くはないが、彼が描き続けたサント・ヴィクトワール山の魅力はそれ以上に強調してよいと思う。単に白い岩山なのではない。近隣の村々から望む角度や時期によって豊かな表情をのぞかせるだけでなく、石灰石でできているが故に、まるで紅富士のような美しい桃色に染まる。

マルセイユより三〇キロほど北東の内陸に位置するこの街の歴史は紀元前一二〇年頃に遡り、ローマ時代の影響を色濃く残している。街の名もラテン語名 *Aquae Sextiae* から読み取ることができるように「水」と深くかわり、今なお街の至る所に大小様々な噴水や湧水として時代を紡いでいる。冬に訪れるならミラボー大通り沿いに点在する噴水の中に一つだけある、温水の噴水を探してみるのも良い。冷たく澄んだ空気と湧水の湯気が柔らかに混ざり合う光景は、露天の温泉を想わせる。

二〇〇七年より大規模に整備された街の玄関口は、すっかり現代的で商業的な雰囲気包まれてしまった。パリにも劣らず夏には国内外の観光客で溢れ返る。オペラの祭典がそれに輪を掛けていることは間違いないが、オペラを楽しむに來る人の中に、日本の能楽師より寄贈された絵幀のお能の舞台がエクスにあることを知っている人は、まだそれほど多くはないだろう。この街に長居できたのは自然の癒しと日本を感じさせてくれるものがあつたからかもしれない。

(たけい ゆき)



Sainte Victoire

ふるさとこだま

大矢芳彦

世界には素敵な町が沢山あり、美しい思い出も多い。カスタニユエラスの音色に癒されたスペインの田舎町カリニエナ、青春の一頁を過ごしたオランダ東部国境の町エンズヘーデ、自然の深淵さを堪能したアリゾナ、フレッジスタッフ。しかし、その中で一つだけ挙げるとすればやはり私のふるさと児玉町であらう。

名古屋駅の北、名古屋城の西方に位置するこの町は、今は何の変哲もないありふれた中核都市の住宅地となっているが、迷路のような路地を散策すると、ちょっとしたタイムスリップを楽しむことができる。

町名の由来は、十六世紀初頭に武蔵野国児玉党の丹羽長政が尾張の守護職の斯波氏に仕えたとき、庄内川の後背湿地のこの地に住み着いたのが始まりとされている。町の中心には一七〇〇年頃に建造されたと言われている素朴な児玉白山社の鎮守の森があり、都会で疲れた心を癒してくれる。戦国ファンなら聞き覚えのある丹羽長秀は、長政の次男としてこの地に生まれ、十五歳から織田信長に仕えた武士で、信長に「長秀は友であり、兄弟である」と言わせる程の人物となった。現在、白山社の南に丹羽長秀邸址の石碑が木陰にたえず、戦国時代へ思いを馳せることができる。

そのため、この町には現在でも丹羽姓の邸宅が少なくないが、界隈を歩くと大矢姓も目に付く。これは鎌倉時代の押切城主大屋佐渡守に由来する。佐渡守は、清和天皇の後胤で源頼朝の命を受け大矢城（現在の稲沢市大矢町）の城主となった大屋安資の子孫といわれる人物である。その後、後胤十七代にあたる大矢重治は貧しい農民の出ながら一代で村方惣庄屋の要職につき、苗字帯刀を許されるまでの地位を築いた。彼は明治になつて多くの文化財が消滅していくのを惜し

児玉白山社



み、名古屋城郭にあった志水甲斐守屋敷の車寄せや二の丸庭園の風信亭などを譲り受けた。名古屋城付近の建築物が空襲によりすべて焼失したのに対し、これらの建物は現在もその威厳を保っている。皆さんも機会があれば、歴史の町児玉町にアタックチャンス!! (おおよ よしひこ)

H・ジェームズのラム・ハウス (Rye, England にて)



ドーヴァー海峡をこえて、ライの町へ

藤井加代子

かつてジュリアス・シーザーや紅はこべが帆船で渡ったドーヴァー海峡を、私たちがフェリーで渡り、イギリスに上陸することにした。フランスのカレーの港を出航したフェリーは、北方の海の深い霧に閉じ込められた。折角このルートを選んだのに、甲板で落胆しているると、突然湿っぽい霧が晴れて、白亜の絶壁が水平線の彼方に忽然と現れた。期待通りの絶景だった。古代ローマ人が侵略時にこの石灰質の白い絶壁を見て、海峡の彼方の島をアルピオン（ラテン語で白を意味する）と呼んだという伝説が、実感と共に腑に落ちた。

ドーヴァーの港で船から列車に乗り換えて、一時間半ほどで東サセックス州のライの小さな駅に到着した。昔、港町として栄えたというライは、中世の面影をたっぷりと残す箱庭のような町で、檜の木の黒樫と漆喰の白壁が、美しいコントラストをなすハーフ・ティンバーの家並みが、長い時の流れに東の間の旅人を誘う。

もとはと言えば、イギリスの小説家ヴァージニア・ウルフの文芸評論で、小説家ヘンリー・ジェームズがライの町に転居したとき、引越しの荷車がマーメイド・インの前の石畳の坂道で往生したと知り、この町に行ってみたいと思ったのだった。ヨーロッパの古い石畳はどれも目を惹かれるが、その坂道の石畳は、類を見ないものだった。不揃いなジャガイモのような石が、道にびっしり浮き出るように埋め込まれていた。旅慣れない私は大きなトラックを引きずって、車輪がその石にひっきり立往生していた。すると通りかかった観光客の一家の父親が、トラックを坂の上まで軽々と運んでくれた。「なかに死体でも入っているの? 大きなトラックだね」と言って、わっと弾けるように笑った家族と去って行った。

坂の上のマーメイド・インに無事到着し、旅装を解くのも早々に、町へ散策に出た。宿の前の道はすぐに突き当たりとなり、右に折れると、突如ジェームズのラム・ハウスが現れた。私は驚きと喜びでひとり興奮した。同行した大学の友人は、障害をもつ息子の世話で手一杯の生活だったが、私が無理に彼女の憧れのイギリス旅行に誘い、ライまで来たのだった。私が喜ぶのを見て、一緒に喜んでくれた。何年も経って、友は「あのとき、無理してイギリスに行つて本当によかった」と言ってくれた。そのことを思い出したときに、一回きりの友とのイギリス旅行は、思い出の中でいっそ輝きを増して、潤むのだった。(ふじい かよこ)

迷い込んだロンドンの通り

高梨芳郎

人の出会いは星の数ほどあるという。偶然の出会いもあれば、必然の出会いもある。人との出会いもあれば、都市や街や通りとの出会いもある。以前、英国で、ある通りに迷い込んだ。Great Ormond Street。大英博物館のすぐ近くにある。

二十世紀初頭。この通りの貸間で不思議な体験をした男がいた。部屋の壁に染みがある。その染みが日を追うごとに顔に見えてくる。男は顔の人物を捜し出そうとする。捜しあぐねた末、ピカデリーに佇むと、タクシード東に向かうその人を見かける。必死に後を追う。チャリングクロス駅へ。フォークストーンからフランスへ向かう船中で、ようやく顔の人物に会う。名刺によれば、何とMr. Ormond Wallという方で、ピッツバークの大富豪。驚き、体調を崩し、ブローニユで休み、ロンドンに戻った男は、新聞記事に驚く。あの大富豪がピサに向かう途中、交通事故に遭い、重傷とのこと。部屋に戻り、壁を見る。すると、壁の顔が目の前でスッと消えていく。その時、あの大富豪が亡くなったとか。

男の語りでは、その体験には、不思議なことが三つあるという。聞き手は皆で確認する。壁の染みが顔に見えて、しかも通りと同じ名前の人が実在した。その人が亡くなると同時に壁の顔が消えた。これで二つ。では、三つめは何か。

授業で、この英文のジグソー・リーディングをする。英文の順序はグループで復元できても、三つめの内容は空所にしたので、わからない。授業の終わりが近づくと、私はその男と同じように言って、教室を後にする。「三十分前に作った話です」。

作者のE.V. LucasはGreat Ormond Streetをどのような思いで訪れたのだろうか。古きよき時代のこと。壁の顔はあっても不思議ではない。英国の古い街並みに思いを馳せた。

(たかなし よしろう)

ハノイ アジアを感じられる街

宮川公平

ハノイの朝は早い。六時過ぎには朝の渋滞が始まる。ハノイの中心に位置するホアン・キエム湖周辺は仕事場に向かうバイクや自転車、自動車であふれかえる。男性も女性も多くが襟付きの長袖シャツに長ズボンを身につけ、自動車に乗らない人の大半はマスクを着用していた。初めて訪問したところ、ハノイ中心部の交差点にしか信号がなく、歩行者が向かってくる車やバイクを器用に避けながら交差点を渡る姿をみて、内心ひやひやしていたことを覚えている。

博士課程後期在籍中の二〇〇一年以降、数度ベトナムを訪れる機会を得た。当初、所属する研究所の先生方がアジアを中心とした途上国の法整備支援プロジェクトを立ち上げ、法務省やJICA、他大学の先生方の協力を得ながら、ベトナム、カンボジア、モンゴルなど、支援対象国の調査研究を行っていた時期であった。初めて訪れた時は、同じ研究室で国際経済法を学ぶカンボジア人留学生の先輩と一緒に、ハノイ法科大学やベトナム司法省など先生方が訪問する予定の場所を事前訪問し、シンポジウムの会場やスケジュールを確認する作業が中心で、街をゆっくり散策する時間も余裕もなかった。それでも、移動の車中から、そして訪問先の司法省やハノイ法科大学周辺で昼食をとりながら、街の様子を伺うことはできた。街はオペラハウス(市劇場)をはじめ、フランス植民地時代の名残を色濃く残し、整然と区画整理され欧風の建築様式を取り込んだ建物が目立つ。他方、ホアン・キエム湖周辺では、通りごとに扱う品物が決まっており、社会主義経済に基づく街づくりもみることができる。また、市内のあちこちに存在する寺院の門に刻まれる漢字を見ると、ベトナムがかつて漢字文化圏であったことが分かる。今ではベトナム人のほとんどが寺院に刻まれる漢字の意味が分からないという。当時、ベトナムはドイモイ政策のおかげで順調に経済発展を遂げていたが、WTO加盟を検討していたため、数度の訪問の間でも、市場経済システムと外資のさらなる導入による街の発展には目を見張るものがあった。とはいえ、ベトナム経済の中心都市ホーチミンとは大きく雰囲気異なる。

考えてみたらハノイという街は、ドンソン文化時代、中華文化圏時代、植民地時代、冷戦時代(ベトナム戦争)、そしてグローバル化時代を経て、もともと「アジア」を感じられる街なのかもしれない。フォー専門店が店先でフォーをすすりながら、ハノイの街並みをゆっくり見渡してみるのはいかがだろうか。(みやがわ こうへい)



オペラハウス(市劇場)

A Little Slice of Cambridge

Simon J. Humphrey

As a student, I would occasionally take one of the punts from my college boatshed and head south out of Cambridge and along the River Granta—a calm shallow river which meanders through fenland, woodland and finally through the open meadowland of Grantchester. Taking turns at the pole with two or three friends for a couple of hours, would eventually bring us to the quaint and tranquil village of Grantchester. And there waiting to greet us, a winding path invited us up to the picturesque Orchard Tea Gardens (or known simply as ‘the Orchard’ to Cantabrigians).

It is worth noting here that the names ‘Cambridge’ and ‘Grantchester’ are related etymologically. In Saxon times, Cambridge was known as Grantabrycge—‘Bridge over the River Granta’. Later, through Norman influence, it was pronounced ‘Cantebrigie’. When it finally took on its modern pronunciation, it seemed only fitting that the name of the river should be changed from Granta to Cam to reflect the city’s name. And as such, the upper stretch of the river is still known locally as the Granta.

Each time I return to Grantchester, I am struck by the tranquillity of this peaceful retreat: the thatched cottages, the ancient stone church, the Old Vicarage and the somewhat nostalgic Orchard. The sepia photographs inside the old

wooden pavilion there remind us that little has changed since Victorian/Edwardian times with its scattered fruit trees, rough cut grass, and groups of wooden deckchairs with their distinctive green cloth. It was amidst these now ancient and gnarled trees that we could enjoy our enormous scones with blackcurrant jam and clotted cream, whilst sipping English breakfast tea.

It is said that the origins of the teahouse date back to 1897 when its owner was asked if she could provide her lodgers with tea under the fruit trees. It was after the poet Rupert Brooke began lodging there in 1909, however, that taking tea became a ‘Cambridge institution’. A century later, we can listen to the sound of ripe apples dropping from the very same branches that Brooke and his steady stream of callers and admirers sat under.

Living in a busy city, the Orchard was where I could truly step back in time and escape the busy hustle and bustle of student life. Its timeless magic made it a corner of Cambridge in which I could quite easily while away a balmy summer’s afternoon amongst the reclining deckchairs, sleepy grass and lazy fruit trees (before embarking on the two hour slog back to the college boathouse!).

(ハンフリー サイモン)

Strawberry Field



リバプール ヘニー・レインと 国際奴隷博物館

佐藤雄大

ロンドンからVirginの特急で二時間北上してリバプールに着いた。ここに来た目的はビートルズ博物館 (The Beatles Story) / John Lennon の生家 Strawberry Fieldを訪ねることのみだった。はじめに (マージー・ビートルの由来である) マージー川に面した開発地域にあるビートルズ博物館を訪れ、一通り展示を見た。その後、少し同じエリアを歩いていると International Slavery Museum という建物が目に入ってきた。ビートルズ以外にさほど知識がなくて驚きだった。中に入ってみるとリバプールが十七世紀から十八世紀にかけてアフリカとアメリカを結ぶ奴隷貿易で中心的な役割を果たしていたことが様々な資料で説明されていて、Liverpool: Capital of the transatlantic slave trade と称されたセクションでは奴隷に使用された手錠や刃物などが展示され、当時の奴隷貿易の様子が詳しく紹介されていた。

そうした展示の中で Penny Lane という名前を見つけた。もちろんあのビートルズのナンバーと同じ「ヘニー・レイン」である。しかしそこで紹介されていたのは James Penny という十八世紀のリバプールで奴隷制度を支持し、奴隷貿易商としても活躍した商人の名前にちなんで Penny Lane が名付けられたことであり、リバプールの他の通称もそうした商人の名前が付けられているということだった。John Lennon, Paul McCartney, George Harrison の祖父がアイルランド生まれであることからリバプールが海上を介して他国とつながりが強いことは知っていたが、奴隷貿易の「首都」であり、その名残が色濃く残っている都市であることは実際足を運んで初めて知ることとなった。

翌日、John Lennon の生家と Strawberry Field を訪ねた。John Lennon の生家は中心部からバスに乗り「ヘニー・レイン」を横切りしばらく行くと郊外 (彼のソロアルバムタイトルのひとつ) Menlove Ave. にあった。生家の前には地元ツアー会社の Magical Mystery Tour という黄色のバスが横付けされ多くの観光客が見学していた。次に Strawberry Field を探すとその生家の裏手にあり、どちらかというとひっそりとした場所であり、人もまばらだった。私はイタリアから来た同年代の観光客に Strawberry Field を背景に記念写真を撮ってもらい、私のビートルズ詣は終わった。(x)とつ たけひろ)

日本のハリウッド 京都太秦行進曲

蔵田敏明

一膳飯屋でコロッケ定食を食べていると、私の隣で素浪人風のお侍が「おはちゃんいくら？」と懐に手をやっていた。さすがに一文銭ではなかったが、現代の貨幣で四八〇円を払っていった。店主も、他の客もサムライの存在を気にも留めていない。京都太秦にある大映通り界隈は、サムライや姫君が普通に歩いている不思議空間なのである。

子どもの頃から忍者ごっこに明け暮れ、主役よりも悪役や端役に夢中だった。思春期の頃はA.T.Gの映画に嵌り、何度も繰り返し同じ映画を観ては、画面の端にかろうじて映る俳優さんまですべて覚えていた。こんな映画少年だったので、京都の大学へ進学してからまず向かった先は、憧れの映画の街・太秦であった。主役級のスターさんも名もなき大部屋俳優さんも、垣根なく皆一緒になつてうどん屋や喫茶店に集まっている。時代劇の扮装のまま市場で買い物をしている。私は歓喜勇躍した。だが、一介の学生が撮影所の門をくぐるはずはなく、東映、松竹、大映と、ただ看板を見ては、ため息をついていた。

しかし、人生とは不思議な縁で繋がっている。その後、映画雑誌の編集に携わり、国際スターと謳われた三船敏郎さんの自宅で最後のインタビューをとった。そのすぐ後、東映撮影所の門をくぐると、北大路欣也さんが私を目敏く見つけてくれ、撮影の出番待ちに「三船さんお元気でしたか」と三船談義となった。撮影の邪魔にならないよう二人して小声で話していると、その話題を小耳にはさんだ神山繁さんたち名優が話題に加わる。「三船さんの息遣いを傍で感じるだけで震えがきた」と神山さんが言う、「いいなあ」と目を輝かせる北大路さん。みんな映画大好きの少年に戻っていた。

ちなみに撮影所通いが高じて監督と意気投合し、中村吉右衛門主演の『鬼平犯科帳』に出演した。見るからにカモにされそうな大店の主人役で、賭場で火付け盗賊改に追い詰められる。子ども時分の忍者ごっこの敵役は、憧れの播磨屋に捕えられた。

(くらた としあき)

大須と本居宣長

玉井俊紀

大須(おおす)は、名古屋の一地域の名前であると同時に、「大須観音」として知られる真福寺宝生院を象徴的に指す名前です。「古事記」の現存する最古の完全写本がこの大須に収蔵されています。最古といっても室町時代、一三七一年から七二年にかけての写本です。「古事記」そのものは、その序に和銅五年(七一二)に奉獻されたとありますから、成立してからはじつに六五〇年以上も経ってからの写本になります。

大須観音にある写本は当時、大須観音の弟子であった賢瑤が書写しました。漢字が一文一文字、瀟洒な楷書で書かれています。

「古事記」は、同じ史書といっても、同じころに正史の立場で編まれた「日本書紀」と違い、漢文(中国語)で書かれてはいません。日本語で書かれています。いまでこそ現代語訳あり、漫画ありと広く親しまれています。編纂された後、長く、埋もれていました。日本語を漢字のみを用いて表現したことが読みにくさにつながり敬遠された、ということもあるのでしょう。室町時代になって賢瑤が書写したころは、「古事記」は散逸の危機に瀕していました。

「古事記」は、江戸時代に、本居宣長の研究によってみごとに蘇ります。宣長は、尾張藩士の一人が大須に伝わる「古事記」の古写本を筆写したことを知り、その手沢本を借り受けたといっています。宣長の研究は、大須とつながっていたのでした。賢瑤の書写の後さらに四〇〇年以上過ぎたのでした。

賢瑤の「古事記」写本は、明治三八(一九〇五)年、国宝に指定されました。数々の戦火を逃れ、第二次世界大戦の米軍機による名古屋空襲にも耐え、現在も完全な形で大須観音に伝わっています。必死になって文化財を護ってきた大須観音の人々の献身に深い尊敬の念を覚えます。

(たまい としのり)

